



で き こ と

今年度の国際子ども図書館児童文学連続講座が、平成22年11月8日(月)～9日(火)の2日間の日程で開催されました。

今回の連続講座の総合テーマは、宮川健郎氏監修による「日本の児童文学者たち」でした。内容は次のとおりです。「賢治童話と子ども読者」・「南吉童話の闇と光」・「日本の児童文学者たち—参考資料紹介」・「金子みすゞ—読みものとしての童謡」・「石井桃子」・「<ヴィジュアル・ストーリーテラー赤羽末吉>の世界」

国際子ども図書館の豊富な資料を用いて、それぞれに個性ある5人の児童文学者について講義が行われました。

(2ページ目にて、概要を紹介します。)

11月18日(木)～19日(金)は、香川県立ミュージアムにて、「全国公共図書館児童・青少年部門研究集会」が開催されました。

「伝えよう、本の楽しさ、読書のよろこび～子どもと本を結ぶかけ橋～」というテーマで、講演会と子ども読書活動にたずさわる人たちの実践報告がありました。講演会は、鳴門教育大学名誉教授・佐々木宏子さんの、親子で絵本を読むことを通して見えてくるものについてでした。実践報告は、乳幼児～児童、児童～高校生の二分科会に分かれ、子どもと本を結ぶ活動についてのさまざまな取り組みが発表されました。

(3ページ目にて、概要を紹介します。)

◇ 子ども図書研究室のテーマ展示 ◇

現在、子ども図書研究室では次の展示を行っています。

■ 「鬼の本」

2009年以降に当館に受け入れた資料から、鬼の出てくる本を展示しています。

■ 「冬の指定図書等」

「第22回読書感想画中央コンクール」の指定図書と「2010年度静岡県学校図書館研究部冬休み推薦図書」を展示しています。



イベント情報 国際子ども図書館 大人のための「おはなし会」体験会

国際子ども図書館では、2011年2月6日(日)まで、展示会「絵本の黄金時代 1920～1930年代 一子どもたちに託された伝言」を開催しています。この展示会にちなんで、大人のための「おはなし会」体験会を開きます。

開催日時 2011年1月8日(土) 13:30～14:45、15:00～16:15 (計2回)

対象 : 大人向け

定員 : 各回25名

場所 : 東京都台東区上野公園 12-49

国際子ども図書館 3階本のミュージアム、及び1階おはなしのへや

参加費 : 無料

申込開始 : 12月1日(水) 先着順です。

申込方法 : 予約電話 : 03-3827-2053 (代表) (内線 : 307)

※ マットの上に靴を脱いで座っていただきますので、動きやすい服装でお越しください。

児童文学連続講座 「日本の児童文学者たち」報告

連続講座の内容は1ページ目のおりですが、講師などの詳細は国際子ども図書館のホームページをご覧ください。今回は、連続講座の中から藤本恵氏(都留文科大学文学部初等教育学科准教授)による「金子みすゞー読みものとしての童謡」をご紹介します。

◆
大正期の童謡ブームにおいて、童謡とは子どもと大人が共に楽しむ「詩」であり、必ずしも作曲はされていません。金子みすゞの「お魚」が発表された雑誌『童話』も、読者は20歳前後の若者が中心でした。

◆
金子みすゞは生涯アマチュアでしたが、音数律を整える、対比を用いて既成概念をひっくり返す等の詩作法を使うことができました。

◆
死後、ほぼ忘れられた存在であった金子みすゞを戦後、発掘したのは矢崎節夫氏です。同氏による全集発行が1984年、評伝発行は1993年です。90年代半ば以降、金子みすゞはブームとなりましたが、その力となったのは、国語教科書への掲載でした。

童謡「私と小鳥と鈴と」の主題を、教育現場では、他者肯定ととらえています。しかし、第1連では「私」と、「小鳥」、第2連では「私」と「鈴」、第3連では「私」と「鈴と小鳥」というように、常に「私」と他者が対比されています。強い自己主張を「私」という言葉の少女性、小鳥・鈴という語彙の選択(カラスと鐘ではない)によって和らげていますが、この童謡における他者肯定は、自己肯定のためにあることが分かります。

◆
そもそも、金子みすゞの童謡、詩、人物は「やさしい」という言葉で公式化されていますが、これは、金子みすゞを発掘した前述の矢崎氏の枠組みにのっとったものです。

しかし、今の大学生に金子みすゞの童謡を紹介し、そこから受ける金子みすゞ像を尋ねたところ、「多角的な視点で物事を見る人」「優しい人」「自分以外の者の立場を大切にしていた人」「当時の社会における女性という意味での弱者」「自身、小さい、弱いというコンプレックスを抱えていた人」「現実主義」「客観的に見ている評論家」などの多様なコメントが寄せられています。

つまり、読者によりイメージは分かれ、公式どおりには収まらないことが分かります。そして、公式を離れたところから、おもしろい読みは始まると言えます。

あまんきみこやまどみちおなど、教科書に掲載されている作品には、このような二重性を持つものが多いと思われますが、図書館でならば、それぞれの作品と出会い直し、別の読みに入れることが可能になるのではないのでしょうか。そのときには子どもたちに改めてそのおもしろさを感じてもらいたいと思います。

◆
この連続講座では、他の講義でも文学作品の教科書への掲載について触れられ、興味深いものがありました。なお、この連続講座については、毎年、翌年度に国際子ども図書館より講義録が出版されていますので、各講義の詳しい報告はそちらでご覧いただけます。

所蔵資料から

文学

『美しい町 新装版金子みすゞ全集・Ⅰ』
『空のかあさま 新装版金子みすゞ全集・Ⅱ』
『さみしい王女 新装版金子みすゞ全集・Ⅲ』
金子みすゞ／著
JULA出版局
1984年8月

(閲覧室)

1984年2月に受注出版された限定版の後、同年8月に出版された。1～3巻までの内容は同じだが、限定版にあった別巻『思ひでの記』の代わりに『金子みすゞノート』が別冊付録として付いている。

(鈴木)

全国公共図書館研究集会
児童・青少年部門報告

基調講演 絵本の読み合いから見えてくる
もの ―親子関係の異質さを中心に―
(佐々木宏子氏)

この講演会のはじめに、同じ絵本でも子どもによって受け止め方はさまざまで、百人百様の読みがあることが言われました。親は絵本を素直に楽しむ子どもの感性を大切に、一般的な発達段階等に振り回されないでほしいことも強調されました。親子が絵本を通して共有体験を重ねていくうちに、親子の内的世界がつながってきますので、テレビやゲームにはない子どもとの親しい交流ができるはずです。

基調報告 図書館サービスの課題
―児童図書館サービスの発展のために―
(坂部豪氏)

「ポストの数ほど図書館を」というモットーを掲げ、戦後の図書館サービスは展開しました。この時生み出された豊かな成果を土台にして、今後の児童図書館サービスを考えていくことが大切です。図書館をめぐる状況は近年決してよいとはいえませんが、そんな中でも「すべての子どもに図書館を」というモットーは守らなければなりません。館種を越えて、子どもと本をつなぐコーディネーターとしての児童図書館の役割を再確認しました。

第1分科会 乳幼児～児童
～おはなしの世界へようこそ～より
「みんなで本のある暮らしを」

(鳥取県大山町立図書館・船原文野氏)

町を挙げて読書環境の整備に取り組む大山町では、教育委員会に司書を配置し、特に就学前の子どもたちへの支援を強化しています。家庭支援事業の一環として、0歳児へのブックスタート、3歳児へのブックセカンド、5歳児へのブックサードと称して、それぞれの年代に適した本のプレゼントと保護者対象の読み聞かせ講座を開催しています。子どもが豊かな心を育み、

未来への夢を語るができるような環境作りという発想がいいと思います。

第2分科会 児童～中・高校生
～読書で広がる人のわ～より
「学校図書館の機能強化のため」

(愛媛県新居浜市立別子銅山記念図書館・坂本睦美氏)

学校図書館の活性化のために、市立図書館側から司書が出向き活動支援を行っている新居浜市立の事例報告です。専任支援員を配属して、学校図書館の環境整備(図書廃棄・レイアウトの工夫等)を行い、おはなし会やブックトークを通して本に親しむ子どもの育成を図りました。このような支援は予算に左右されることが多いようですが、学校に不可欠な図書館をPRすることで成功した事例といえます。

パネルディスカッション
～各分科会発表者と助言者による討議～
助言者・正置友子氏のお話より

人が自由かつ平等でいられる図書館は、人間の存在を保障する場です。その現場で働く図書館員の皆さんが元気に仕事をしていることが、子どもと本に関わる活動の源になるはず。どうか大きな声で、自分たちの活動をPRしていきましょう。

◆
各地の様々な熱意ある取り組みに触れ、今後の子どもの図書研究室の活動を考える良い機会となりました。本研究集会の紹介事例について詳細を知りたい方は、遠慮なく静岡県立中央図書館まで連絡をください。

所蔵資料から

研究書

『絵本は赤ちゃんから』



佐々木宏子／著
新曜社
2006年2月

親子で絵本を読むことについて無限の可能性を感じるこの本です。

(小松)

新着資料から

絵本 『みんながつかうたてものだから』



サジヒロミ／絵・文
偕成社
2010年9月

まあちゃんはお父さんと妹のみいちゃんと一緒に、お母さんの歌の発表会を見に、市民ホールへ出かける。会場の市民ホールは、バリアフリーの建物で、あちこちにさまざまな工夫がされている。

点字ブロックやユニバーサルトイレ等、公共施設で見かける工夫について、まあちゃんたち家族と一緒に、子どもはもちろん大人も詳しく知ることができる。読んだ後に出かけると、街の見方が変わるかもしれない。

【小学校低学年から】 (小松)

文学 『エレベーターは秘密のとびら』



三野誠子／作
たかおかゆみこ／絵
岩崎書店
2010年8月

小学生のリセがある朝マンションのエレベーターから降りると、そこには意外な景色が待っていた。女の子たち3人による、変なうわさのエレベーターをめぐるナゾとかが始まる。エレベーターを降りるごとに変わる景色は、いったい何を意味するのか。

謎ときには伏線も張られていて、読者も一緒に推理するつもりで読み進められる。こんなエレベーターがあったら乗ってみたいという人もきっと多いだろう。福島正実記念SF童話受賞作品。【小学校中学年から】 (剣持)

知識 『太陽と光しょくばいものがたり』



藤嶋昭・かこさとし・
村上武利・中田一弥・
落合剛・野村知生／共著
偕成社
2010年8月

太陽の光に含まれる紫外線を受けて酸化分解と超親水性の力を発揮する光触媒。その力を利用して、車の排気ガスに含まれるすすを分解する壁や、雨や霧の日でも曇らないカーブミラーなど、さまざまな製品が作られ、私たちの周りで使われている。

大人でも理解するのが難しい光触媒の力を、「色水の実験」など3つの実験を通して子どもにも分かりやすく紹介している。光触媒を製品化する際の問題と、それを解決するための工夫も興味深い。【小学校高学年から】 (児玉)

文学 『SCAT スキャット』



カール・ハイアセン／著
千葉茂樹／訳
理論社
2010年8月

自然観察の校外学習中に山火事が起き、トゥルーマン学園で最も恐れられている生物教師、スターチ先生が行方不明になった。放火犯の疑いをかけられたのは、学園の生徒で、先生と対立していた問題児ドゥエーン。ところが、事件の裏には石油採掘企業の陰謀が隠されていた。

自然破壊と野生動物保護の問題をベースにしたヤングアダルト向け小説。強烈な個性を持つ登場人物とその行動が魅力的。ミステリー仕立てで、読者を大団円までぐいぐいと引っ張っていく。【中学生から】 (鈴木)